

# 論断

中嶋 嶺雄

(東京大学 外国語学 助教授)

宮沢・喬冠華両外相のニューヨーク会談は、いわゆる「覇権」問題をめぐる日中平和友好条約交渉のクライマックスだったのではなからうか。二回にわたる長時間の会談は、友好的な雰囲気のうち

にすんだが、その内容はかなり厳しいものであったように伝えられている。「覇権」問題では、やはり日中双方に大きな距離があり、従って、中国側が従来の主張を譲ってこないかきり、日中平和友好条約交渉は、当面、凍結されることになるかもしれない。三木首相は、依然として、交渉の再

開と成功に熱意を示しているようだが、これから正念場を迎える日中関係への配慮や国内政局の推移といった外在的条件を別にしても、状況はかなり厳しいように思う。

ているように、「投降主義」への批判が沸きあがっている折柄、そのような「玉虫色」の解釈を相手に許すことがそもそも「投降主義」になるであろうから、この点でも妥協の余地は小さい。第二に

## 「覇権」問題の教訓

### わかった日中関係の困難さ



中嶋 嶺雄氏

喬冠華外相の演説、日中友好団体にたいする最近の張香山講話など、いずれも革命外交の復活を思わせるトーンで真かれている。喬冠華外相にしても、五〇年代から周恩来首相の部下だといわれている

の日中関係において必要なことなのであり、また宮沢外相であればそのような責務を果たし得たであろう。この意味では、形のうえでの妥協以上に収穫の多い会談であったと思われる。

が、喬外相自身の講話からすれば、周首相とは本来的に肌合いの違う原則主義者たとの印象を強く受ける。

こうして、日中交渉のボールは、中国側にあずけられたのであるが、想えば昨年の今頃は、政府・外務省もマスコミも、日中平和条約はすぐにも締結できると考えていたのであり、そもそも日中国交樹立の際の共同声明に「覇権」条項が入っていたときには、その含む重大な意味にまったく気づかなかったのであるから、たとえ交渉は凍結されても、日中関係とはなにかを初めて本当に考えるようになったという点で、わが国が得た教訓は絶大なものである。こうして日中関係の真の困難さが、ようやく認識されるようになったのである。

まず第一に、「覇権」反対は平和諸原則の「二つ」というわが国政府の当面の方針にしても、たんに中国において「覇権」反対が即座にソ修社会帝国主義への反対を意味していることのみならず、最近の『水滸伝』批判にも含意され

は、最近の周恩来首相の健康状態などからする活動の低下によって、中国外交のいわゆる現実主義路線が少なからず動揺していると思われることである。去る三月の北京における中国外交部幹部への江青女史の講話や去る五月の天津における

よ、日中交渉の前途は厳しいであろう。だが、今回の日中交渉にかんし、宮沢外相が「こちらの言いたいことはすべて言い尽くした。これ以上なにもいうことはない」と記者会見で語っているように、「すべてを言い尽くす」ことこそ現段階